各戸配布

川路まちづくり役員会便り　第６号

『豊かで活力ある安全安心な川路』の実現！　２０２１年（令和３年）７月７日

６月２７日はどの様な日かご存知ですか？川路まちづくり委員会会長の今村正大さんから、「３６災から６０年、当時先頭に立って復旧、復興に尽くされた方々も少なくなり、話題に上ることも少なくなりました。だからこそ、私たちは水難の里の歴史を次の世代に伝えて行かなくてはなりません。そこで皆様に提案致します。私は３６災が起きた今日を忘れない為に、６月２７日を「川路水害予防の日」に制定したいと思いますが、皆様ご賛同頂けますでしょうか？」と力強く提案され、満場一致の盛大な拍手で承認されました。川路３６災６０年式典は、国土交通省天竜川上流河川事務所長の佐藤保之様、飯田市長の佐藤健様他多数のご来賓をお迎えし、去る６月２７日大勢の地区住民の皆様にご参加頂き、厳かに開催されました。式典に先立ち、信州飯田岳風会川路支部の皆様を中心に構成吟「水難の里に生きて」が上演されました。川路小学校５・６年生の皆さんに「川路小学校校歌」を斉唱して頂き、多くの人が忘れかけてしまっている「川路中学校校歌」を川路まちづくり委員会会長ＯＢの皆様に斉唱して頂きました。ピアノは川路３区ご出身の清水正則さん、現在飯田文化協会会長他音楽関係の要職を多数務めておられる方ですが、川路の仲間として一緒に参加させて頂き大変嬉しかったと後日お礼のハガキを頂きました。又、吟に合わせて書道を書いて頂いたり、芸能の里づくりの会の皆様と指導者の柘山先生の伴奏、川路七区ご出身の安井サチ江さんの唄、２区の田端徳江さんの踊りで、川路の日本三大桑園を偲ぶ「伊那節」を披露して頂きました。長谷部厚子さんの朗読「幼子をお茶箱に乗せて泳ぐ」は当時の生々しい避難の苦しい様子を伝えて頂き、会場のあちこちでもらい泣きする姿が見られました。式典では前述の今村会長の挨拶の中での「川路水害予防の日」制定の提案があり、佐藤飯田市長からは、「この様な式に川路小学校の生徒の皆さんが参加され、苦難の歴史を知る機会を得たことはとても素晴らしい出来事と思います。」とご挨拶を頂きました。講演では、昨年の千曲川堤防決壊の大水害当時、長野市長沼地区の自治会長をされていた柳見澤宏様より「長沼は継承されながら、のみ込まれた、～～まさかに対する日頃の備え～～」と題し、「災害発生時安否確認が出来ず、大変苦労した。避難した方から地区の役員に無事避難している旨を連絡する体制が非常に重要である。」等々貴重なお話をして頂きました。又パネルディスカッションでは、災害時救援の要となる消防団に関して、飯島分団長から消防団員のなり手が少ない現状を心配する説明が有りました。火事だけでなく、有事の際全てにおいて支援の中心になる消防団員の勧誘が有りましたら、是非ご協力頂きたいと今村会長からもお願いが有りました。又清水卓さんからは、川路の水害対策は決して完了しておらず、水害のリスクは高い旨、佐藤市長にしっかりとお願いする意見も頂きました。その後牧内幸雄水防組合長の「大会宣言」（次ページ掲載）発表があり、式典を終了しました。

３６災６０年式典に参加して頂いた皆様

川路中学校校歌を歌って頂いた会長ＯＢの皆様

田端徳江さんの吟に合わせ書を書く安藤勝さん

講演して頂く長野市長沼地区「柳見澤宏」氏

パネルディスカッション参加の皆さん

裏面もご覧下さい

プレイベント「天竜川ウォーキング」

３６災６０年式典前日の６月２６日、川路の水害に関する歴史的遺構を実際に歩きながら、地元の先輩から説明をお聞きしようと「天竜川ウォーキング」が行われました。かわらんべ屋上に初めて上り、寺澤館長から天龍峡エコバレーの復興の歴史をご説明頂きました。又森本源次郎さんから死人岩、音瀬岩の歴史に関して説明して頂きました。天龍峡では木下忠行さんに天龍峡の水害の歴史と３６災当日のご自身の体験をご説明して頂きました。木下さんも清水卓さんも通行止めの姑射橋を制止を振り切って龍江から川路に渡って帰宅したとの事でした。天伯岩では橋本國雄さんより天伯岩の歴史と川路・龍江の境界争いの歴史をお聞きし、時又港では今村公人さんから川路の和紙の輸送で隆盛を極めた歴史を紹介頂き、貝暮が淵では今村智司さんから誕生と埋め立ての歴史を紹介頂きました。初めてお聞きする天竜川周辺の遺構の歴史に、とても有意義なウォーキングでしたと大変好評を頂きました。説明をして頂きました若い古老の皆様ご協力有難うございました。

大　会　宣　言

私たちは、母なる大河 天竜川との共存を求め、長い年月を掛けて天竜川に挑み続けて参りました。時に暴れ川と化す天竜川、古くは正徳の未満水に代表される大洪水さえも先人たちの努力によって乗り越えて来ました。

昭和期に入って、下流に電源開発のためのダムが建設されると、水害が頻発するようになり、日本三大桑園と謳われた桑畑は、その度に泥の海へと変ってしまったのです。

こうした中、昭和36年の梅雨前線集中豪雨、所謂36災害は、幾多の水害を経験してきた先人たちをも、恐怖のどん底に突き落とす大災害となりました。川路のコミュニティーは、この水害でズタズタに分断され、修復不可能なほどの大きな打撃を受けました。更に地域復興への願いは、ダムの撤去という抜本的問題にまで発展、天竜川の水利権更新と併せて交渉は難航し、被災から24年後の昭和60年にようやく妥結・調印を迎えました。そこには、先輩たちの血の滲むような苦汁の決断があったのです。

36災という大災害から60年。先輩方の大変な苦労の末に崩れる心配がない堤防が完成して、私たちは今、安寧な暮らしを営んでいます。他地域の人々がうらやむほどの川路を作りあげていただいた、全ての先輩諸氏に心から感謝を申し上げるとともに、この大切な経験を必ず次世代に伝えて参ります。

しかし、このように状況が改善されても、私たちは天竜川を切り離して生活はできません。名勝天龍峡には、三遠南信自動車道の大橋が架かり観光客も増加、見下ろせば、母なる天竜川は今も悠々と流れています。天竜川水系の上流域の面積はおよそ3,700平方ｋｍ、そこに大量の雨が降った場合、天龍峡の狭窄部は昔と同様、天然のダムと化し、濁流が川路に襲い掛かるのは明らかです。

経験則だけでは測りきれない近年の気象状況。そのために私たちは、これからも天竜川に挑み続けなければなりません。本日、「伝えよう水難の里の歴史を～36災から60年～」のシンポジウム開催にあたり、以下のことを固く誓い、大会宣言とします。

私たちは、天竜川の水位を見守ります。私たちは、流れ来る土砂の量が適量であるよう努めます。私たちは、ひとたび洪水が発生するとき、隣近所で助け合い最少の被害に留めるよう努力します。そして、6月27日を「川路水害予防の日」として長く記憶に留め、水難の里の歴史を語り繋いでまいります。

令和3年6月27日

貝暮が淵説明碑前で遠い江戸初期の歴史を今村さんからお聞きする

天伯岩前で川路と龍江の境に関する歴史と天伯岩歴史を橋本さんからお聴きする

かわらんべ屋上で「川路の水害と復興」に関し寺澤館長の説明をお聴きする

蛍観察会の翌日、相生広場は沢山の蛍でした

６月２０日の蛍観察会は残念ながら小雨で僅かな蛍しか観察出来ませんでしたが、翌日の２１日は沢山の蛍を見る事が出来ました。右の写真は相生広場近くの大畑沢の蛍です。印刷では実感が良く伝わりませんが、確実に川路に蛍が復活している様です。先日笑門の北沢光勇さんがお店の近くの音溝川でほたるを見たと話してくれました。天竜峡八十二銀行駐車場近くです。

川路でも昔の様に蛍がいる当たり前の夏が近いかも知れません。

大畑沢の蛍

りゅうのライトダウンまーけっとに協賛しました

７月２日にココロマルシェで「りゅうのライトダウンマーケット」が行われましたが、皆さんご参加頂けましたでしょうか？地球環境や温暖化防止を考える機会として全国的に実施されているライトダウンキャンペーン。この趣旨に賛同して川路竹宵の会、天龍峡アヴニール倶楽部が協賛して竹灯篭の宵祭りが行われました。当日は小雨ながら、大勢のお客様に来て頂き蒸し暑い夏の夜を涼しく楽しんで頂けました。

竹宵の準備をする川路竹宵の会の関島晟さんと若手も加わった天龍峡アヴニール倶楽部の皆さん